

るようにとしか言えなかったが、この社会で身体障害者として生きていくのは厳しいものがあるのではないかと。子供とは思えない暗い目が忘れられない。

9月23日、マラバタン町ツガル村に行く。今回は遠いので1泊。米軍払い下げのトラックで山を越え、川を10回ぐらい渡り、溯り、(荷台の人達は大変どころでは無い様だった。私は助手席に座らせて頂いた)やっとたどり着いた村は35軒という小さな村だった。電気も水道も無いが、とても清潔で、馬、豚、犬、鴨の親子などが歩き回り、のどかな村。川が増水すると危険で渡れず、小学校を休むというのは気になった。しかし、小さな子どもたちは、急な坂道を家まで水運びし、日が沈めばランプの灯でおしゃべりや歌を楽しみ、蛍が飛びかう心豊かな暮らしだ。私たちはもう戻ることは出来ないが、この暮らしに学ぶことが多いように思っ



ヘルスワーカーのリジャ（左）が英語からビラン語へ通訳する  
（ツガル村）

た。水源から引いた水で調理、洗濯、シャワーをし、下水は川に流れていく。トイレは穴を掘り、水をかける方式だが、不思議と匂いは無くハエなども居ず清潔だった。

この村では、患者数は少なかった。症状としてはバサグの人たちと似ていたが、2例、虚を付かれたケースがあった。1人は6歳くらいの女の子の食欲不振と不眠。よく聞いてみると1ヶ月前に両親の留守中にハンモックから落ちて以来という。内科的には問題なさそうで、落ちたショックと寂しさ（彼女は長女で下に2人兄弟がいる）によるものと考えられる。もう1人は若い女性で不眠。精神的なものから来る症状に、何の用意もしていなかった自分を深く反省した。子どもの方はお土産に持って行った菓子パンを食べていて、‘ミロ’なら飲めるというので点滴代わりに渡し、女性の方は、同行者の方がたまたま持っていた安定剤を少し頂いて、半錠ずつ飲むよう渡した。昼間は半袖で過ごせる気温なのに、夜は深々と冷え、長袖のトレーナーと薄手のズボンでは寒くて眠れないほどで、この気温差が咳の原因かと思った。また、後から知ったのだが、村では1日1食、ご飯が主だった。私達は3食とおやつまで出して貰い、村人はどんな思いで私達が食べているのを見ていたのだろうと、申し訳ない思いだった。

2つの村の印象として、症状は日本の外来で診るものと同じものが多かったが、進行している例が多い。そして必要な時にすぐ薬が手に入らないということが大きな違いだ。しかし逆に自然治癒力はあるかもしれない。皮膚病や下痢に関しては食生活が影響しているように思われた。咳に関してはもう少し詳しい情報が欲しい。歯痛を訴える人が何人もいて、一時凌ぎの鎮痛剤をあげるしかなく、歯科が必要だ。下痢に対して点滴をしてあげたいが準備が出来ず、代わりにスポーツドリンクの粉末や、ミロなどを用意すると良いと思った。重症患者への対応が一番の問題だろう。巡廻診療で出来る事は本当に僅かなのだが、それでも喜んでもらえたことは嬉しかった。長い間辛い農作業をしてきて、関節痛と筋肉痛を訴えた老人に薬を塗り湿布を貼った後に‘Thank you,Mam.’と言って笑顔で握手をされたときは、本当に嬉しかった。